

フットサルの普及過程について

～大会参加者の意識調査より～

The famailierizing process with Futsal
～From a survey to participants of a match～

森 恭・乗 原 公

Yasushi MORI and Isao KUWAHARA

はじめに

フットサルは5人対5人（うち1人ずつがゴールキーパー）で主に屋内のピッチで行われるサッカーの一形態である。競技ルールでは縦25～42メートル、横15～25メートルの長方形のピッチが規定されており、国際試合は原則的には縦40メートル、横20メートルで縦38～42メートルから横18～22メートルの許容範囲の中で行われる。11人で行われるサッカーは国際試合規定で縦106メートル、横68メートルのピッチで行われることを標準としており、フットサルピッチは面積比でサッカーピッチの約1/9である。

FIFA（国際サッカー連盟）は、それまで別組織で活動していたサロンフットボールをはじめさまざまなミニサッカーを統括し、1987年にFUTSALとしてルールを制定。第1回世界選手権が1989年にオランダで行われ、2000年には第4回が中米のグアテマラで行われるに至っている。

アジアでは第2回世界選手権が香港で行われたこともあり、フットサルに対する取り組みは世界の中でも南米、ヨーロッパに次いでいる。フットサルアジア選手権は1999年にマレーシアで第1回が行われた。引き続いて、第4回世界選手権の予選を兼ねた第2回大会が2000年にタイで、第3回大会が2001年にイランで開催され、今後毎年開催されることがア

ジアサッカー連盟で決定されている。

国内では1996年に全日本フットサル選手権（16歳以上が参加）、全日本ジュニアユースフットサル大会（中学生年代が参加。現全日本ユース（U-15）フットサル大会）が始まり、2001年（2000年度）には第6回を数えている。また、これに先立ち1994年には小学生年代を対象にした全日本少年フットサル大会が、1992年から行われていた全日本少年ミニサッカー大会を引き継ぐかたちで開始されている。全日本小学生フットサル大会は2001年（2000年度）で10回を数えている。現在日本サッカー協会が主催する公式試合はこれら3大会となっている。

このようにフットサルは、サッカーのリードアップとしてのミニサッカーという位置づけのみならず、競技としても確立しつつあるスポーツであると言える。

日本サッカー協会ならびにその傘下にある日本フットサル連盟では、上記のような競技としての発展をフットサル振興の一つの軸とし、また「いつでも、どこでも、だれでも」をスローガンとして、生涯スポーツとしての振興をもう一つの軸として活動を展開している。

このような世界あるいは日本国内のフットサルの振興の流れの中で、新潟県におけるフットサル振興の手掛かりを探ることを目的に、新潟県内におけるフットサルへの関心の程度について意識調査を行った。調査の目的に沿って、調査対象はフットサルを行った経験のある人として、フットサル大会への参加チーム代表者ならびに大会への問い合わせをおこ

なった人を対象とした。

新潟県においては、高校生以上を対象とした全日本フットサル選手権新潟県大会に第1回は3チームが参加し、以後17, 22, 18, 20, 第6回では24チームと第2回以降参加チーム数は微増していた。そして、大会期間と大会形式を大幅に変更した第7回大会では65チームが参加するに至っている。今回の調査では、今後のフットサル振興のための大会の在り方を探るために、大会期間ならびに形式についての意見徴集も目的としている。このため特に調査対象者を全日本フットサル選手権新潟県大会への参加者関連とした。

調査方法

調査期間 2001年2月18日、および2月26日～3月3日

調査対象 第7回全日本フットサル選手権新潟県大会への参加チーム代表者（以下、参加者とする）ならびに同大会への問い合わせを行ったが大会不参加であった人（以下、不参加者とする）。尚、大会規定により代表者の年齢は20歳以上である。

調査の手続き 参加者に対しては2月18日に行われた大会参加チーム代表者会議で調査への協力を依頼し、会議終了後に提出を求めた。代表者会議に出席した63チームのうち、56チームから回答を得られた（回収率88.9%）。

また、不参加者に対しては郵送で調査用紙を配布するとともに、回答を依頼した。調査用紙の返送については、同封封筒による郵送、FAX、E-mailのいずれも可能としたが、E-mailによる回答はなかった。61名に調査を依頼し、回答は21名より得られた（回収率34.4%）。ダイレクトメールによる調査であるため回収率の低さは当然予想されたことである。大会に参加しなかったにもかかわらず、回答を寄せた人たちはフットサルに関して、一定レベル以上の関心のある人であることが考えられよう。

結果および考察

1. 大会方式について

全日本フットサル選手権新潟県大会は第6回までは10～11月の秋季に行われてきた。これは、全日本大会が1月もしくは2月、そのための地域予選である北信越大会が12月に行われることによる。新潟県大会は北信越大会の予選を兼ねており、優勝の1チー

ムが北信越大会に出場する。また北信越大会の優勝1チームが全日本大会に出場できる。このように、地域・都道府県大会が階層的にその上位大会の予選となっているやり方は日本サッカー協会の主催する大会では一般的なものである。このような全日本大会までの大会全体の方式のために、全日本フットサル選手権新潟県大会は11月までに大会を終了している必要がある。

また、新潟県におけるフットサル愛好者の多くはサッカー愛好者でもあり、新潟県サッカー協会主催・主管の大会にも参加している。このため、春季から秋季半ばまでのサッカーシーズン内にフットサル大会を開催すれば、大会期間が既存の大会を重複する恐れがある。特に全日本フットサル選手権の対象者が16歳以上、つまり高校生、社会人、大学生等を含んでいるため、多くの大会が開催される上記期間を外しての大会開催が必要とされている。上記のような理由から、全日本フットサル選手権新潟県大会は第6回までは10～11月の秋季に行われてきたという経緯がある。

しかし、この期間のみの開催では大会期間を長く取ることができず、大会参加チーム数を増やすことが困難であった。

また、新潟県におけるサッカーシーズンを考えた場合に、オフシーズンは外での活動が制限される冬季であり、この時期での大会開催であれば参加者のニーズがあり、また他の大会との重複も避けることが可能となる。

上記のような理由から、第7回全日本フットサル選手権新潟県大会は3月に予選を開幕することとした。しかし、北信越大会が12月であることから、新潟県大会優勝チームが北信越大会を十分に戦えることに配慮して11月にも大会を行うこととし、大会予選ラウンドを3月、決勝ラウンドを11月に行うこととした。

このような大会方式の変更に対しての回答者の考えを図1-1（参加者）および、図1-2（不参加者）に示す。

いずれも「賛成」が71%と高いものであった。「反対」と「もっとよいやり方がある」を合わせた積極的な反対の割合は参加者で11%、不参加者で5%であった。反対の理由や改善すべき点としてあげられたものを表1にまとめた。

最も多いものが「予選ラウンドと決勝ラウンドの期間が開き過ぎる」であった。次に多かった「年度をまたがないほうがよい」と合わせて、今後検討す

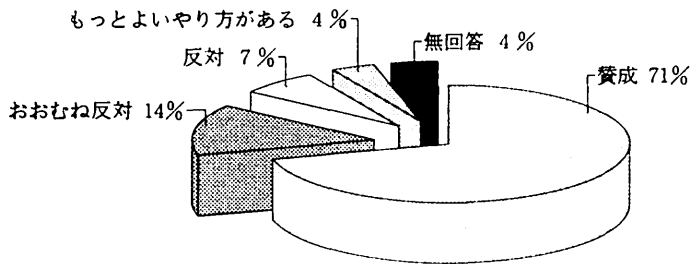


図1-1 新しい大会方式に関する考え（参加者）

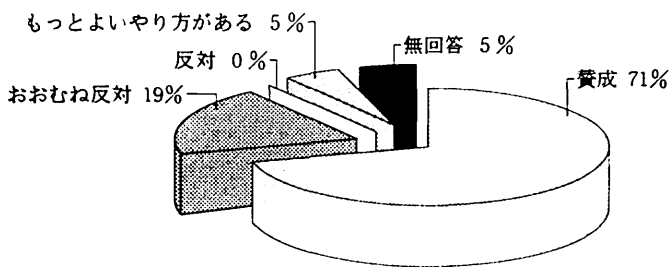


図1-2 新しい大会方式に関する考え（不参加者）

表1 今回のような方式に対しての反対意見、もっとよいやり方の意見

参加者	・予選と決勝の期間があきすぎる	5
	・年度内でないとメンバー編成に支障が出る	3
	・より多くのチームが参加できるように	2
	・全試合審判委員会から派遣をお願いしたい	3
	・申し込んだチームすべてが出られるように	1
	・他の大会との日程調整ができれば賛成	1
	・地区ごとに抽選・説明会を開いてほしい	1
	・3月の大会は賛成	1
	・全国大会予選なので抽選による参加チーム決定はよくない	1
不参加者	・審判の意識・レベルが不均等。ある程度のレベルが必要ではないか	2
	・高校生（高校チーム）は3月困難	1
	・申し込みチーム全てが参加できるように	1
	・もう少し気軽に参加できればいい	1
	・クラス分けや年齢別などがあればいいのではないか	1
	・代表者会議終了後に審判講習会をやしてほしい	1
	・試合を増やしてほしい	1
	・参加手続きの簡略化を	1
	・いい大会であると思う	1
	・審判講習会を各地区別に行ってほしい	1

べき課題として最も大きなものであろう。ただし、冬季の終わりの時期に大会を行うことについては一定以上の賛同が得られており、この点に関しては継続すべきであると考え。今後新潟県サッカー協会内での事業計画の策定方法を考慮しながら、3月の大会は残しながら、全日本選手権については切り離す等の方策を考えていく必要がある。この他には、審判関連の指摘や「気軽に参加できるように」「より多くのチームが参加できるように」などの回答が得られた。

また、不参加者にのみ尋ねた大会への不参加の理由をまとめたものが図2である。

もっとも多いものが大会スケジュールの問題であり、やはり大会期間が長くなることで、既存の大会との重複が起こる可能性は高くなることが予想される。しかし、できるかぎりサッカーシーズンを外した今回の日程において参加チームが第6回の3倍近く（24チームから65チーム）増加したことは、より参加しやすくなったとも言えよう。また、高等学校チームの参加は4チームであったが、不参加の高等学校指導者からも3月が高等学校においては繁忙期であり、参加が困難になったことが指摘された。3月の予選ラウンドの日程が合わなかった事がもっと

も多い理由とされていることからこのあたりの配慮の必要性を感じさせられる。

また、過去高等学校チームの参加が最も多かったのは第3回大会の8チームであり、それ以後増加はしていない。ユース年代の公式大会がないことも関連づけて、今後の検討課題であろう。

2. リーグ戦実施可能性

競技力向上のため、また日常的な活動のためにリーグ戦の開催は欠かせないものであると言える。リーグ戦を行う際のチームの範囲についての相応しい順位を尋ねたものが表2である。

さらに、自チームのリーグへの参加可能性についても回答を求めた。可能性のある範囲全てをチェックするよう求めたところ、図3-1（参加者）と図3-2（不参加者）のような結果を得た。

いずれもb県内の地区（上越、中越、下越など）ごとの開催が第1位であり、次いでa市町村単位、c全県範囲の順となっている。身近という意味では市町村単位が最もふさわしいものの、参加チーム数等を考慮したり、運営のマンパワー、会場の手配等を考えると地区単位が相応しいとなるようである。また、参加者のなかには新潟市内在住者が多く、市

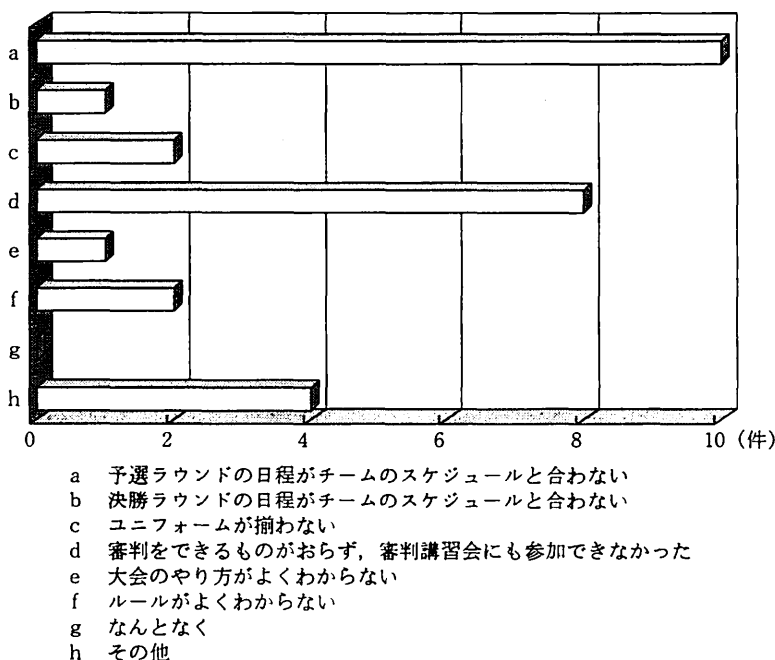


図2 大会不参加の理由（不参加者のみ）

表2 リーグ戦実施の際の参加チームの範囲についての考え

		参加者(N=56)	不参加者(N=21)
a	市町村範囲		
b	地区範囲		
c	全県範囲		
d	地域範囲		
e	全国範囲		
a b c d e		13	9
a b c **		3	0
a b ***		3	0
b a c d e		11	4
b a ***		2	2
b c a d e		6	2
b c d **		4	2
b c ***		1	0
b d ***		1	0
b のみ		3	0
c a ***		1	0
c b ***		3	1
c d ***		2	0
e ***		2	0

内と地区がほぼ同義に捉えられていた可能性も否定できなく、参加者においてa市町村単位とb地区単位の差が小さくなった原因である可能性も否めない。

さらに、リーグ参加可能性についてb地区単位とa市町村単位、もしくはc全県範囲とを組み合わせた図4-1, -2, 図5-1, -2からも伺うことができる。

リーグ参加可能性についてb地区単位とa市町村単位を組み合わせた図4-1(参加者)では、ともに参加可能性ありとした者が参加者全体の59%, b地区単位は可能であるがa市町村単位は不可能とした者が11%, この逆が23%, どちらも参加できないとした者が全体の7%であった。不参加者ではこの割合が51%, 10%, 29%, 10%となり(図4-2), 大きな傾向の違いはみられないが、参加者の方が比較的リーグ戦への参加の意欲を見せている様子が伺える。

図5-1は同様に参加者について、b地区単位とc全県範囲とを組み合わせたものである。いずれにも参加可能とした者は参加者全体の27%で、b地区

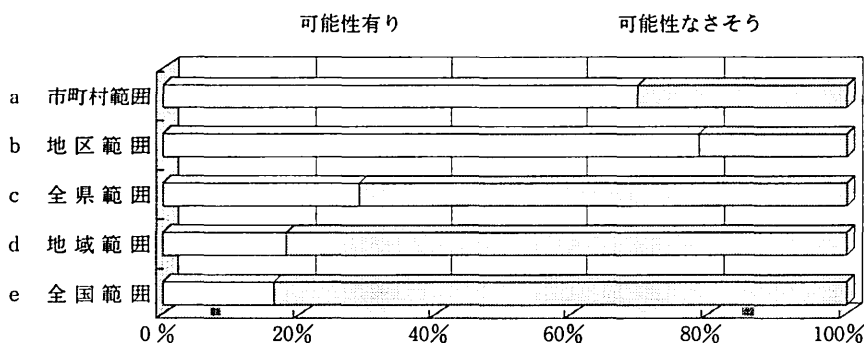


図3-1 リーグへの参加について (参加者 N=56)

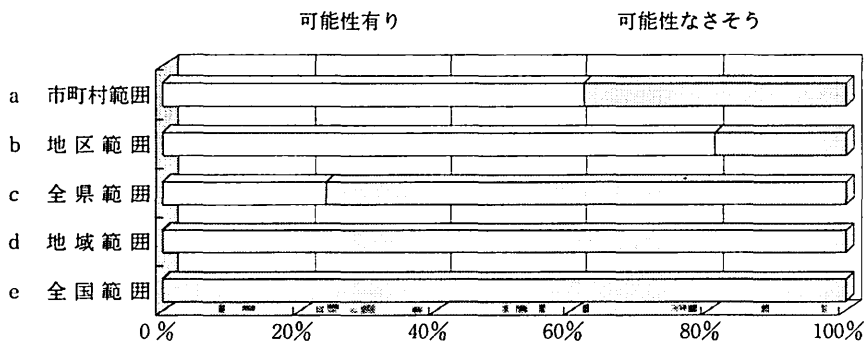


図3-2 リーグへの参加について (不参加者 N=21)

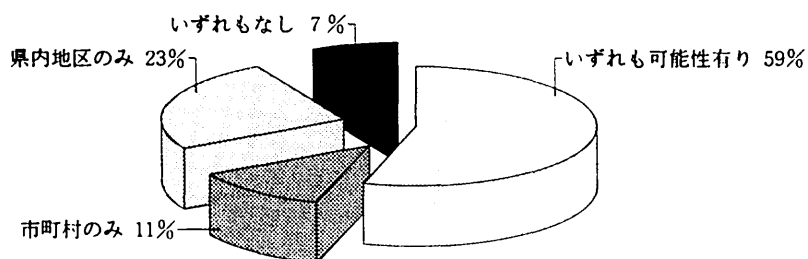


図4-1 リーグへの参加について：市町村と県内地区（参加者）

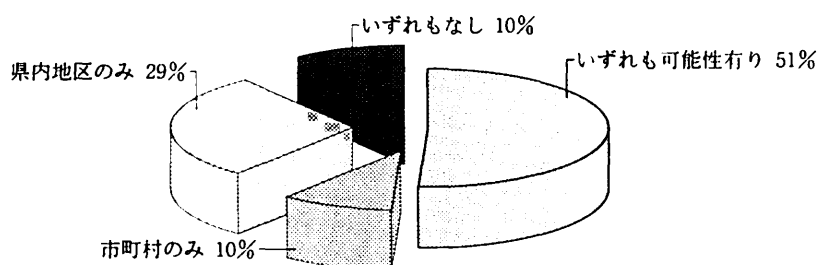


図4-2 リーグへの参加について：市町村と県内地区（不参加者）

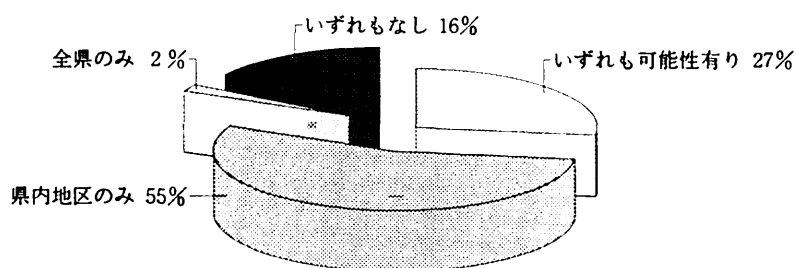


図5-1 リーグへの参加について：県内地区と全県（参加者）

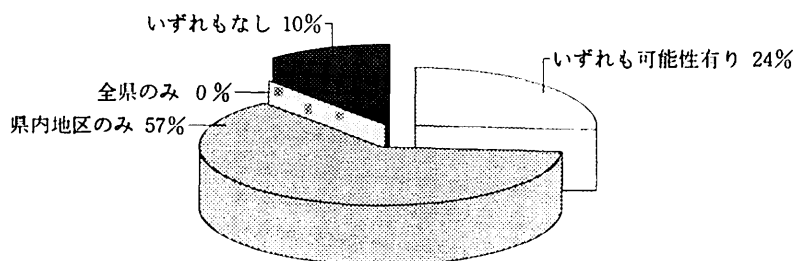


図5-2 リーグへの参加について：県内地区と全県（不参加者）

単位のみが55%, c 全県範囲のみが2%, いずれにも参加の可能性は低いとした者は16%であった。この数字は非参加者でもほぼ同様に24%, 57%, 0%, 19%であった(図5-2)。

この4つのグラフから、参加者、非参加者ともに市町村と地区をリーグの単位として似ているものとして捉えていることが伺える。これに対して地区と全県範囲は多少意味合いが異なるものとして捉えられているようである。このことは前者の組み合わせについては、過半数が同時に参加可能であるとしているのに対して、後者の組み合わせでは同時に参加可能としたのは全体の1/4程度であり、地区のみ可能としたものが過半数を超えていることからわかる。ここでの知見は単にa市町村単位とb地区単位のリーグへの参加可能性が高いというのみならず、両者のいずれか、特に地区単位のリーグ設立が有効であることを示唆している。

また、d国内の地域単位、e全国範囲という回答は参加者のみで得られた。自チームが全国リーグへの参加までを想定している、つまり競技としてのフットサルも意識しているチーム代表者が存在しているということである。数の大小について、他県や全国

資料等の比較対象がないが、全国大会につながる大会への参加チームに、このような代表者が存在することは心強いものであり、競技としてのフットサルも次第に浸透しつつあることを伺わせるものである。

さらに、リーグ戦設立に関する3つの問に対して、自由記述を求めた。まとめたものが表3～5である。

表3より、冬季のリーグ設立に対しては概ね賛同が得られ、その理由として冬季はサッカーを屋外で行うことのできない新潟県の気候をあげる回答が多かった。また条件付きの賛成の場合にも雪の影響を考慮しながらすすめるべきという意見があった。

平日夜間のリーグ戦設立についての回答をまとめたのが表4である。仕事やアルバイトがあつて困難という意見と夜なら社会人には好都合という対照的な意見が出されている。また、都市部では可能であろうが、郡部では移動時間を考えると困難という意見もあり、地域性も関連しそうである。

リーグ戦設立全体に関する回答(表5)の中には、「もっと多くの大会を実施してほしい」「早朝も可能ではないか」「クラス別がよいのではないか」などがあった。

表3 冬季のリーグ設立についての意見

参 加 者	・賛同	9
	・冬にもサッカーができるのがいい	7
	・是非実現を	5
	・市町村程度の狭い範囲のリーグを	4
	・積極的に参加したい	3
	・運動不足の解消にいい	1
	・サッカーリーグ終了後であればよいと思う	1
	・雪の影響が心配	1
	・審判についての規定もしっかりしてほしい	1
	・内容がはっきりしてから参加を考えたい	1
	・クラス分けも必要	1
	・休日であれば賛成	1
	・寒さ対策も必要であろう	1
不参加者	・賛成	2 + (3 + 1)
	冬にはサッカーができないため	3
	一年間サッカーをやりたいから	1
	・雪による交通の不便さを補える範囲、狭い範囲で	5
	・ぜひ実現を	5
	・場所が確保できるのなら賛成	2
	・横のつながりができてよい	1
	・概ね賛成だが経費、審判の育成なども問題	1
	・社会人も参加できるかたちであれば	1

表4 平日夜間のリーグ設立についての意見

参加者	・賛同	12
	・社会人は（仕事で）忙しいので困難ではないか	11
	・是非実現を	5
	・日程・会場がクリアできれば賛成	2
	・高校生の参加が難しくなると思う	2
	・社会人にはよいのではないか	1
	・分散した方式で	1
	・週1回程度であれば賛成	1
	・クラス分けしたほうがよい	1
	・移動の時間もあり困難	1
	・冬の平日夜間がよい	1
	・可能性はありそう	1
	・日曜日の方がよい	1
	・地域・クラス別にいくつかのリーグがあるといい	1
	・全ての人が全日程参加することは難しいだろうが参加したい	1
不参加者	・社会人は（仕事で）忙しいので困難ではないか	5
	・社会人と学生（主に高校生の意味？）との兼ね合い	3
	・休日の前夜なら可能か	2
	・どのくらいの頻度で行われるかによる	2
	・ぜひ実現を	2
	・賛同	2
	・部部では移動の時間がかかり難しいと思う	1
	・場所が確保できるのなら賛成	1
	・市町村等の範囲であればすぐにでも	1
	・サッカー登録チームからの複数登録できればいい	1
	・日曜日の方が移動の問題をクリアできる	1
	・移動時間があまりかからない狭い範囲で	1
	・地区リーグから県リーグにつながるような形で	1

表5 リーグ設立に関するその他の意見

参加者	・大会をやってほしい、特に冬	1
	・2シーズン制もよいのではないか	1
	・とにかく大会を	1
	・クラス別がよい	1
	・早朝も考えてはどうか	1
不参加者	・試合の機会・大会を増やしてほしい	2
	・施設が使えるように	1
	・11人サッカーをやっているチームからも冬期間のフットサルリーグの声も上がっている是非実現を	1
	・是非ともリーグ戦の実現を	1
	・クラス別の大会がもりあがるのではないか	1
	・夜間リーグを是非	1

3. その他

指導者講習会が開催された場合に参加するつもりかどうかについては、参加者では（図6-1）「是非参加したい」「できれば参加したい」を合わせて69%、不参加者でも62%と高いものであった（図6-2）。

最後にフットサルに関して、フットサル委員会についての意見を求めたところ表6のような回答が得られた。

いくつかにとまとめると、フットサルを行える会場、特に体育館を増やしてほしい。そのために委員会やサッカー協会から働きかけてほしい。フットサルをアピールして盛んにしてほしい。大会の数を増やしてほしい。各種講習会を開いて、また宣伝してほしい。もっと気軽にできるようにしてほしい、などの意見が得られた。いずれも今後の検討課題として重要なものであろう。

まとめ

今回の調査からは

- ・新潟県内にはフットサルを楽しんで行いたいという人々が多く存在すること。
 - ・フットサルのプレーを現在のレベルで楽しむのみならず、自らのレベルをより高めていこうというプレーヤーも存在していること。
 - ・多くの大会開催が望まれていること。
 - ・なかでも恒常的な活動の場としてのリーグ戦を望む声が多いこと。
 - ・リーグ戦に参加するチームの範囲としては市町村や県内の地区を希望する声が多かったこと。
 - ・気軽にプレーしたいこと。
 - ・多くのニーズに合うような、クラス別等の開催形式の工夫が望まれていること。
 - ・新潟の気候の特徴から、冬季にサッカーを行う手段としての価値が認められつつあること。
- などの積極的な知見が得られたと同時に
- ・屋内施設の利用が困難であることが、フットサル

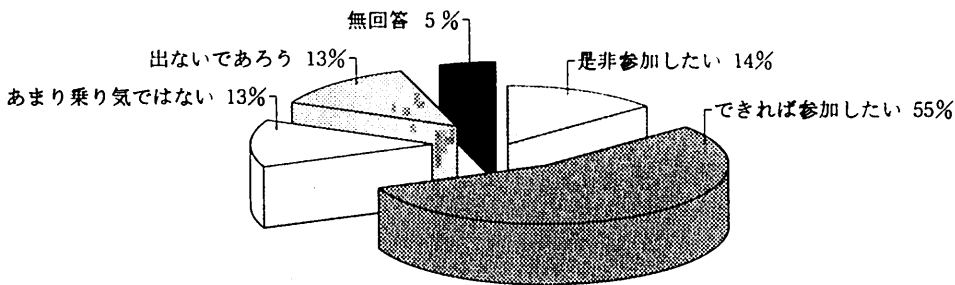


図6-1 指導者講習会参加について（参加者）

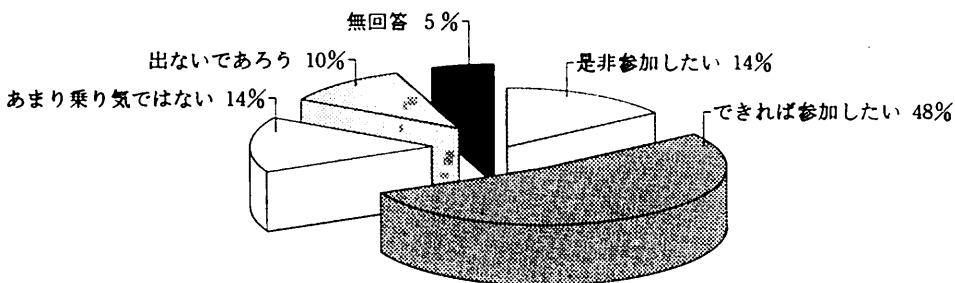


図6-2 指導者講習会参加について（不参加者）

表6 フットサルやフットサル委員会への意見

参加者	・大会を増やしてほしい	4
	・フットサルのよさ 少ない人数,狭いところ,年齢を超えてできる,テクニック中心でスキルアップにつながるなどの特徴をアピールしてほしい	1
	・もう少し弾むボールのほうがいいと思う	1
	・5対5では少々つらい	1
	・大会を継続してほしい	1
	・さまざまな種別,対象の大会を作してほしい	1
	・講習会を多くやってほしい	1
	・審判講習会の告知が少なすぎる	1
	・ピッチサイズの許容範囲を狭くしてほしい	1
	・審判講習会の説明をもっと詳しく書いてほしい	1
	・使える施設を増やしてほしい	1
	・雪国新潟ではフットサルはとても重要	1
	・もっともっと気軽に参加できるスポーツにしてほしい	1
	・屋内サッカー場がほしい	1
	・夜間にフットサルを行う施設がほしい	1
不参加者	・もっとフットサルを盛んに	3
	・施設利用の可能性を拡げてほしい	2
	・大会の数を増やしてほしい	2
	・フットサルのアピールを	2
	・指導者講習会はいつあるのか,アナウンスしてほしい	1
	・身近にできるようにしてほしい	1
	・大会参加費さげてほしい	1
	・他に大会があれば参加したい	1
	・調査の締め切りが早すぎる	1
	・予選はもう少しおおざっぱでもよいのではないか	1
	・リーグ戦に興味あり	1
	・県単位,地区単位での大会を	1

における日常的な活動や大会開催の妨げとして大きく立ちはだかっていること,もまた認められた。さらにフットサルの適正な振興のためには

- ・ルールの理解
- ・フットサルの技術,戦術に対する理解,が不可欠であると感じている人が多く,審判講習会,指導者講習会の希望も多くみられた。

参考文献

- 財団法人日本サッカー協会(2000) フットサル競技規則
- 日本フットサル連盟(1988) FUTSAL Official HandBook III